

## 過去の放送

#300「すまいる！」2月3日 OA



働く喜びを知った。自信を持った。そして、新たなチャレンジが始まった。

2000年に設立された調布市社会福祉事業団・知的障害者援護施設「すまいる」は、利用者に、職業訓練や職場実習の機会を提供し、仕事を通じての自立、社会参加を支援している。毎朝9時から行われるパン作りもそのひとつだ。

パン作りをする利用者は、「毎日忙しいです。」「すごく柔らかくて、安くて、すごく美味しいパンです」「パンの成型が楽しいんです」と、作業に嬉々と取り組む。

そんな利用者を見守り指導をする職員は、「以前は一時間かかった仕事が40分で済むようになったり、成長が凄いです」と目を細める。

開設当時は10種類だったパンも、今では200種類を超える。この日は40種類、500個のパンを作り、調布市近郊の大学や企業に向かった。目的はパンの販売。パン作りから販売まで、みんなが経験するのだ。収益の一部は彼らの収入になり、自信も芽生える。

AFLAC(アメリカンファミリー生命保険会社)でパンを販売するようになって10年。「活動も凄いなと思っているんですけど、何より美味しいから来ているんです」「種類も豊富で、すごい美味しくて」と、彼らの活動やパンの味を知る人は多い。

施設長・渡辺益男さんは、「主旨を理解して下さって(場所を)提供して頂いているんですけど、だからこそ、私たちもそれに甘えるんじゃなく、十分に美味しいものと、そうつもりでやっています」と、顧客の期待に応える努力を惜しまない。

「すまいる」では、地域の親子を招いて「手作りパン教室」を開いている。その教室に、卒業生の最首慶紀さん(27歳)が姿をみせた。彼は、3年間、「すまいる」

でパンを作ってきた。パン教室で黙々とパン作りをする最首さんを見て、「すまいる」の職員は、「前はお喋り大好きで、ニコニコ笑ってて、今日は静かに、みんなの前で模範というか、昔、覚えた技術を伸び伸びと見せていますよね」「別にパンを作る職人を作る訳ではなかったのに、彼の中での能力がここで伸びればいいかなって思っていました」と、慶紀さんの成長を喜ぶ。そして、慶紀さんの両親は、「忍耐力、継続していく力っていうんでしょうか、そういうものがついたんじゃないでしょうか。自分でこう何かをやり遂げるとか、そういう力っていうのは徐々に付いてきているようです」と、慶紀さんを評価する。

「すまいる」での経験を経て、昨年、最首さんは京王電鉄特例子会社京王シンシアスタッフに就職した。自立へ第一歩を踏み出したのだ。

働く喜び知って、自信を持って。